ISAPH News Letter

アイサップ
ニュースレター

第22号

2015年11月30日発行

写真:ラオス　調査で訪れたサイブートン郡の子どもたち

ISAPHはラオスとマラウイの母親と
子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

ラオス国カムアン県 サイブートン郡で パイロット調査を実施

ISAPH事務局　**齋藤　智子**

2015年9月9日から約1カ月間ラオスへ派遣されました。2005年からISAPHがセバンファイ郡保健局と協力して活動してきた母子保健プロジェクトが今年12月で終了し、来年からサイブートン郡で新しくプロジェクトが開始される予定です。新プロジェクト開始前には調査により活動地域の特に母子の保健情報を収集し、その情報によって活動の骨組みを考える必要があります。今回のパイロット調査は本調査前に行う模擬調査のようなもので、調査者は問題なく対象者へ質問することができるのか、対象者は質問の内容を理解して答えられるのか、一つの質問票に何分くらいかかるのか、調査対象の世帯間の距離はどのくらいかなど、本調査をスムーズに進めるにはどのようなことを修正すべきかを把握するために必要な作業です。今回の私の派遣目的はこのパイロット調査を支援することでした。

サイブートン郡へはISAPHラオス事務所から車で約2時間かかります。パイロット調査当日は早朝タケク市を出発し、マハサイ郡の風光明媚な山々を見ながら快適に1時間ほど過ぎたあたりから、突然でこぼこの舗装されていない道路になり、前日の雨で道路はとてもぬかるみ、立ち往生している車やトラックがあちこちに見られました。パイロット調査は郡保健局から調査者2名と彼らの監督者1名、ISAPH職員3名（トンスックさん、赤羽さん、齋藤）とカウンターパートのソムサヌック氏で実施しました。チームは2チームで3村15名の5歳未満の子を持つ母親にインタビューをしました。道案内は村の女性同盟の方と保健ボランティアがしてくれました。訪問した村々はセバンファイ郡の村と比べて自然が多く、住民ものんびり暮らしている印象を受けました。ひとりのインタビューには約30～40分かかっており、予定していた15人のインタビューを終了したのが、午後6時ころでした。今回のパイロット調査で把握できたことは、母親へのインタビューなのに周りにいた家族が代わりに答えていたり、得られた回答が回答項目に該当しないものがあったり、調査者の質問内容の把握がまだ十分でなかったことなどでした。

パイロット調査が終了した9月下旬に聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策先生と松葉剛先生がカムアン県へ来られました。疫学が専門の松葉先生からは今回のパイロット調査で把握できた点を基に改善策の助言を受けました。また、データ入力フォームの作成、入力方法、分析方法まで具体的なご指導をいただき、大変勉強になりました。浦部先生はパイロット調査の実施状況把握、本調査に向けての修正点の助言を始め、サイブートン郡での新プロジェクトに関するラオス政府とのMOU（了解覚書）の内容に関してISAPHラオス事務所長の武繁氏と話し合いをしました。

本調査は10月5日から4日間実施いたします。調査結果については、またISAPHよりご報告いたします。

母親への聞き取り

県保健局を表敬訪問

松葉先生からデータ分析方法の指導を受ける

ラオスにおける第９回 National Health Research Forumに参加

ISAPHラオス　**武繁　政昭**

2015年10月13日から14日にかけて、ビエンチャンのドンチャンパレスホテルで行われたNational Health Research Forum（NHRF）に参加しましたので、報告致します。

NHRFは、ラオス政府が国家目標として掲げる保健政策に係る調査能力の向上を目的として毎年開催される会議で、今回はラオス、日本、タイ、オランダ、フランスなどの国から約200名の研究者、NGO、ラオス政府職員等が、それぞれの研究成果を35のプレゼンテーションと26のポスターで発表しました。1日目は、ISAPHも大変お世話になっている議長のコンサップ先生の挨拶と趣旨説明の後、マラリア・母乳育児の事例発表がありました。2日目は、母子保健・喫煙やアルコールが健康に与える影響・予防接種のキャンペーンの成果などの事例の発表がありました。

ISAPHは、今年の4月に実施した第3期MOU（了解覚書）の報告会を基に、ポスター発表を行いました。ISAPHの10年間のカムアン県セバンファイ郡での活動は、県・郡保健局、ヘルスボランティア、女性同盟とも協力して、健康教育等の活動を行うことによって、5歳未満の低体重児割合の減少、健康教育参加率の増加、自宅分娩率の減少、ビタミンB1欠乏症による死亡者の減少等の成果を上げてきました。NHRFの1日目に行われたパネルディスカッションで、調査に係る財政面と人的な課題について議論になりましたが、カウンターパートと協力して健康教育を行ったISAPHの活動成果は、この議論に対する一つの参考事例になると思いました。

今回のポスター発表にあたり、資料作成で詳細にご指導いただきました聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策先生に感謝申しあげます。私自身、このような会議での資料作成、ポスターでの発表は、恥ずかしながら初めての経験で、浦部先生には基礎的なところからご指導いただきました。今回NHRFでISAPHの活動を紹介するにあたって、自分たちの活動成果をどのように第三者に見せ、理解してもらうかという点を意識しながら、資料を作成しました。このことはNHRFでのパネルディスカッションでも取り上げられた、調査でのカウンターパートへのアカンタビリティー（説明責任）にも繋がっていくと思います。また、NHRFの会議の合間にコーヒータイムや昼食会、懇親会などに参加された方との交流があり、多くのインプットをいただきました。今回のNHRFでの成果発表および関係者との交流を通して大変勉強になり、このような貴重な機会をいただいたことに感謝しています。

NHRF参加の1週間前には、ISAPHは新規MOUの活動を計画しているサイブートン郡でベースライン調査を実施しました。ISAPHのセバンファイ郡での活動成果と今回NHRFに参加して得た貴重な体験を、これからのサイブートン郡での活動にも活かしていきたいと思います。

ポスター展示を参加者に説明

議長のコンサップ先生と

参加者全員で集合写真

ご寄付いただいた靴をラオスの活動地域に配布しました

ISAPHラオス　**武繁　政昭**

ISAPHラオスのカムアン県セバンファイ郡での活動では、栄養改善を中心とした母子の健康増進のための活動を行っています。活動における問題の一つは、栄養の吸収を阻害する要因である腸管寄生虫の感染率が高いことです。とくに鉤虫の感染率が高く、鉤虫はトイレの後に手をよく洗わずものを食べると口から感染しますが、土壌にも幼虫がおり、皮膚を突き破って感染するため、裸足で歩かないことが感染予防につながります。しかしながら、活動地域では靴を履く習慣がないため、健康教育を行ってもなかなか靴を履いてくれません。

長年ISAPHをご支援いただいているりそな銀行久留米支店の方にそのようなことをお話したところ、同支店長のご尽力により株式会社ムーンスター様から子ども用運動靴100足をご寄付いただけることになりました。また、カンダホールディングス株式会社様のご支援によってラオスまでこの靴を輸送していただけることになりました。6月にお送りいただいた靴は寄生虫予防のキャンペーンとして、日頃ISAPHの定期活動で村人の健康増進に携わっているセバンファイ郡のカンペータイ、カシ、シーブンフアン地区の保健ボランティアと女性同盟の子どもたちに配布し、靴を履いてもらい、靴の普及活動にご協力いただいております。その3地区のうち、シーブンフアン地区には既に配布しており、今回10月28日にカシ地区の対象者22名に靴を配布致しましたので、ここに報告致します。

郡保健局職員と保健ボランティアによるモバイルクリニック活動では、5歳未満の子どもの身体計測や、栄養や衛生の健康教育活動を行っています。2015年の1年間は、ISAPHはこの活動に直接的な支援を行わず、郡保健局主導で行われていますが、その活動もだいぶ軌道に乗っています。保健ボランティア、女性同盟と郡保健局職員に対し、靴をお届けすることになった経緯を説明し、健康増進のために靴を活用していただくようお願い致しました。保健ボランティアと女性同盟の子どもたちは、普段履くことができない丈夫な日本製の靴を手に取って、とても喜んでいました。子どもたちは早速靴をはいて、ボールを蹴ったりして、元気に遊んでいました。村の子どもたちの活き活きした姿を見て、靴に対する興味や関心を抱いてくれることを期待しています。村の住民は貧しいですが、携帯電話やテレビを購入する人が増えています。靴もその重要性と履くことの快感が分かれば購入する住民が増えると確信しています。

ISAPHのセバンファイ郡での活動は、今年の12月で終了しますが、ISAPHが活動を開始した2005年以降、築いてきた信頼関係と実績は消えることはないと思いました。ISAPHの名前にもある通り、村人たちの健康増進のためのパートナーシップを構築していくという点では、今回のような日本の企業の皆様との連携も一つの形であると思います。改めて、今回ご寄付いただいた靴の配布に携わっていただいた株式会社ムーンスター様、カンダホールディングス株式会社様、りそな銀行久留米支店様に感謝申し上げます。

いただいた靴を履いた子どもたちの成長を楽しみに、来年1月以降もセバンファイ郡での活動が途切れることなく、より一層の成果を上げることができるようこれからも見守っていきたいと思います。

早速サッカーをする子どもたち

真新しい靴を履いて記念撮影（カシ地区）

「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」の進捗について

ISAPHマラウイ　**村井　俊康**

現在ISAPHは、マラウイにおいて「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」を聖マリア病院と共同で実施しています。５歳未満児の栄養状態の改善を目指す当プロジェクトはJICAの技術協力の枠組みを利用したものであり、2016年５月のプロジェクト終了へ向けた追い込みを行っている最中です。

当プロジェクトが栄養改善のために採用している方法は、大別すると２種類が挙げられます。まずは知識の普及です。マラウイでは食べ物が全くないという訳ではないのですが、人々が口にするものに栄養の偏りがあることは否めません。そこで、子どもや母親に、子どもたちの成長に良い食べ物を食べてもらえるような知識の普及が必要となっています。また、栄養のみではなく、下痢や寄生虫の予防につながるような教育を含めて、当プロジェクトでは総合的な知識の普及を実施しています。

２つ目の方法は、マラウイ政府が実施している保健医療サービスの補完・強化です。マラウイではもともと医師や医療従事者の数が足りず、保健医療サービスの充足のためにHSA（健康監視員）とよばれる人材を育成してきました。しかし、実際には健康監視員の数も不足しており、このような状況が十分な保健医療サービスの提供を難しくしています。そこで、当プロジェクトでは各村においてボランティアを育成し、健康監視員がボランティアと協働できるような体制を目指しています。また、低栄養児の数を減少させるためには、低栄養状態に陥った児を、マラウイ政府が実施している治療プログラムへと拾い上げる必要もあります。そこで、現地保健センターと共に、対象児の体重測定を含めた成長モニタリングを毎月実施しています。

村における栄養教育の風景

研修中のボランティア

当プロジェクトが重点的に活動を行っている拠点８村の中には活動が停滞した村もありましたが、新しいボランティアを募り研修を行うことによって上記のような活動を再開させています。また、当該８村において活動の形を作りながら、順次それを他の村へも拡大している最中です。

３年という限られたプロジェクト期間の中で低栄養児の比率等を劇的に改善するようなことは非常に難しいと言わざるを得ません。しかしながら、その分、当プロジェクトには様々なことを試行し、また、今後の活動に資するようなデータを収集することが求められています。対象村を広げ、拠点８村における対象児の数が950名（2015年９月末時点）となっている現状では、各種データの分析について手作業では追いつかなくなっている状況ですが、情報処理技術を用いることにより異なる方面からのデータ分析及び利用を試みています。また、今後も当プロジェクトの進行もしくはマラウイ国の保健医療システムの改善に資するような基礎データの収集に努めるとともに、それらを可能な限り数字で、また、視覚的に表現することによりマラウイ政府等に対して適切なフィードバックを行うことができればと考えています。

最後になりますが、今年に入り当プロジェクトの活動に関連し、大豆栄養の一例として、大塚製薬株式会社様から提供していただいた大豆栄養食品を配布するといった試みも行いました。また、公益信託アフリカ支援基金様より資金を得てヘルスポストにワクチン保管用の冷凍冷蔵庫を導入しました。太陽光発電で稼働する同冷凍冷蔵庫に保管したワクチンを、他のヘルスポストにおける予防接種に利用するといった広がりもみられます。

マラウイ「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」に参加して

青年海外協力隊26年度9次隊　**岡部　麻里**

2014年10月から2015年7月までの10カ月間、マラウイのJICA草の根技術協力事業「子どもにやさしい地域保健プロジェクト」に参加させていただきました。この度の派遣は、JOCV（青年海外協力隊）からNPO法人ISAPHに派遣されるという、少し珍しい形の派遣でした（通常JOCVは、現地組織に派遣される事が多いです）。現在JICAでは民間連携に力を入れており、その一環の派遣とのことでした。

当事業は、マラウイの北部にあるムジンバ県南部地域における5歳未満児の栄養状態の改善を目的したものです。もともと、子どもの栄養状態の改善に予防的な視点から取り組みたいと考えていたので、私がまさしく従事したかった仕事でした。プロジェクトの内容も継続性を考慮し、地域の風習や習慣に沿った、無理なく改善を促すプログラムになっており、共感が持てるものでした。また、調査（ニーズアセスメント）→計画→実行→評価→改善という枠組みがプロジェクトの中でうまく回っており、今後、活動を計画する上での勉強になりました。そして、なにより個性的なマラウィアンのお母さんたちとの触れ合いは、本当に面白かったです。

実は、私は2000年から2002年までの2年間、マラウイ南部で学校の先生をしており、今回でマラウイ滞在は2回目になります。12年ぶりのマラウイ渡航でしたが、驚く程変わっていませんでした。畑や山・湖などの自然環境、建物のつくり、道路沿いの景色など、10年以上を経たとは思えませんでした。しかし、しばらく生活や活動をしてみると、電気や水道もない地域のお母さんでも高い頻度で携帯電話を持っていたり、首都では渋滞があり車の増加には目を見張るものがあったりと、いくつか変化が見られました。発展とは、援助とは、何だろうと考えさせられる事象でした。大きな変化がないのは、現地の人たちがそれを求めていないからだろうか？　資金・資源不足の問題か？　ガソリンが購入できないのに車を持ったり、充電ができないのに携帯を持ったりするのはなぜだろう？　新しいもの好きの国民性か？　先進国の市場拡大戦略か？　などなど。答えはありませんが、考えるいいきっかけになったと思います。

今後は、国際協力に公衆衛生の立場から参加していきたいと思っております。今回のマラウイでの活動は、私の将来にとっても大変有意義で貴重な経験となりました。このような機会と経験を与えてくださったISAPHの職員の方々に、深くお礼申し上げます。また、現地語を解さない私の相手を一生懸命にしてくれた、マラウイのお母さんや子どもたち、現地職員の方々にも感謝を捧げたいと思います。ありがとうございました。

体重計測をする現地ボランティア

お母さんたちの勉強会終了後、集まってきた近所の子どもたち

寄付をいただきました

ONE by ONE 事務局様より、70,451 円の寄付をいただきました。ありがとうございました。

ISAPH事務局

マラウイ赴任のご挨拶

ISAPHマラウイ　**朴　正美**

はじめまして。この度、ISAPHマラウイ事務所に赴任致しました朴正美（パクチョンミ）と申します。マラウイへは、これまで２度訪れたことがあり、その２回とも修士課程の学生として初等教育に関する研究を目的としたものでした。３度目となる今回は、はじめてのマラウイ北部での滞在となります。ISAPHマラウイ事務所のあるムジンバは、マラウイ中部や南部とは使用する言葉も違えば風土も異なり、毎日が驚きの連続です。

「Warm Heart of Africa」と言われる通り、マラウイの人々はとても温かく親切で、一度会ったら次はもう「Hello, My Friend!」と気さくに声をかけてくれます。フィールドワークで出会う村の住人やマザーグループの方々は、私たちが訪れるたびに手を叩いて歓迎してくださるので、彼らの温かい待遇に心が洗われます。これからマラウイの方々の優しさに触れて生活できる幸福感を抱くと同時に、その優しさを当たり前に思ってしまわぬようにと心に決めました。

現地スタッフのアンジェラさんと

まだ着任したばかりですが、目の前にあることだけでなく、その先を見据えて、自分にできることを最大限発揮できればと思っています。現地の人々のニーズを知り、私たちアクターがそれぞれどのような思いでプロジェクトを進めていかなければならないのか、具体的目標をもって行動すること。事務所所長はじめ調整員、現地スタッフ、村の住民やボランティアスタッフ一丸となって、より良いプロジェクトを創り出せるよう、邁進していきたいと思います。よろしくお願いします。

ラオス国カムアン県にて インターンシップ開始のご挨拶

ISAPHラオス（インターン）　**百合澤　順子**

はじめまして。この度７月から約半年間NPO法人GLOWの海外インターンシップとしてラオスの母子保健プロジェクトに関わらせていただいています百合澤順子と申します。今まで山梨県や鹿児島県の離島で助産師や看護師として主に病棟で勤務した経験しかなく、国際協力として長期で海外に滞在するのははじめてです。

フィールドワークに参加させていただき、日本では当たり前に行われていた妊婦健診や乳幼児健診、予防接種などの保健活動が、こちらではその必要性から理解してもらい、参加してもらう、健康を自分たちの手で守る意識付けをする、という今まで考えたことのない問題に触れ、多くの刺激を受けています。

地域医療保健とは何か、国内や海外で考える機会をいただき、改めてその地で住民が住民らしく生きる道を考えさせられます。国や地域毎に抱える問題の背景には、文化や歴史、政治、医療保健政策、地理的問題など多くの因子が絡んでいると思います。その一つ一つを理解し、現状を捉えどう医療保健問題にアプローチしていくのか、地域毎に考えていく難しさと楽しさを実感しています。また、災害支援、物資支援、活動支援など、様々な支援のかたちがあると思いますが、一時的な支援とは異なり継続的に住民たちの健康を守るためには、地域に入り、住民や政府・保健局と関係性を築き、共に考え、少しずつ改革された長年の過程があってこそだと感じています。

まだまだ現地の言葉もわからず、現地スタッフに助けていただき、教えていただくことも多いですが、活動や生活を通して学んでまいりたいと思います。今回は研修を受け入れてくださり関係者の皆様には大変感謝申し上げます。私にできることがあれば精一杯させていただきたいと考えています。どうぞよろしくお願い致します。

現地スタッフと共に靴の贈呈式に参加

最近のできごと　2015年6月～9月

7月16日	【マラウイ】 朴正美氏をプロジェクト調整員としてマラウイに派遣
7月20日	【ラオス】 百合澤順子氏をインターンとしてラオスに派遣
8月3日~7日	【ラオス】 シーブンフアン地区において、ご寄付頂いた靴を配布
8月7日	【マラウイ】 海外教師研修（JICA九州）によるプロジェクト活動視察を受け入れ
8月10日~19日	【マラウイ】 聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏をマラウイに派遣
8月23日~27日	【ラオス】 保健医療経営大学・東京医科歯科大学・愛媛県立医療技術大学のスタディツアーを受け入れ
9月9日~10月9日	【ラオス】ISAPH事務局の齋藤をラオスに派遣
9月17日	【ラオス】 サイブートン郡にて次期MOU（了解覚書）のためのパイロット調査を実施
9月21日~26日	【ラオス】 聖マリア病院国際事業部部長・ISAPH理事の浦部大策氏とISAPH顧問の松葉剛氏をラオスに派遣
9月26日	【ラオス】 聖マリア病院とISAPHが合同で実施する病院管理研修に参加するため、マホソット病院の研修員４名が日本へ出発

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員　年会費：30,000円

一般会員　年会費：3,000円

【振込先】
郵便振込　口座名　特定非営利活動法人ISAPH
口座番号　00180-6-279925

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、ISAPH事務局までご連絡いただければ幸いです。

特定非営利活動法人ISAPH

【福岡事務所】
〒813-0034
福岡県福岡市東区多の津4-5-13　スギヤマビル４階
TEL.092-621-8611

【東京事務所】
〒105-0004
東京都港区新橋3-5-2　新橋OWKビル３階
TEL.03-3593-0188　FAX.03-3593-0165

E-mail　jimukyoku@isaph.jp
URL　http://isaph.jp/

ISAPHの役員名簿

役　職	氏　名	備　考
理事長	小早川 隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理　事	深見　保正	元福岡県企業管理者
理　事	浦部　大策	聖マリア病院国際事業部
理　事	江藤　秀顕	神山復生病院
監　事	竹之下 義弘	弁護士（東京六本木法律特許事務所）

【ISAPHニュースレター　第22号　編集スタッフ】
石原 潤子／磯 東一郎

社会医療法人
雪の聖母会

聖マリア病院

理事長：井手 義雄　　病院長：島 弘志
〒830-8543　福岡県久留米市津福本町422
TEL.0942-35-3322㈹　FAX.0942-34-3115
URL　http://www.st-mary-med.or.jp

- 厚生労働省臨床研修指定病院
- 厚生労働省歯科臨床研修施設
- 厚生労働省臨床修練病院
- 地域医療支援病院
- 福岡県救命救急センター
- 福岡県総合周産期母子医療センター
- 福岡県救急告示病院
- 福岡県地域災害拠点病院
- 福岡県エイズ治療拠点病院
- 福岡県肝疾患専門医療機関
- 福岡県災害派遣医療チーム指定医療機関
- 福岡県第二種感染症指定医療機関
- 地域がん診療連携拠点病院
- 福岡県小児救急医療電話相談施設
- 福岡県児童虐待防止拠点病院
- 久留米広域小児救急医療支援施設
- A Baby-Friendly-Hospital-Initiative（赤ちゃんにやさしい病院）WHO・ユニセフ指定
- 自動車事故対策機構NASVA療護施設
- ISO 9001認証施設
- ISO 15189認定施設
- 日本医療機能評価機構認定施設（一般病院Ver.6.0）
- 日韓医療技術協力指定病院
- 久留米市病（後）児保育施設

※本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力をいただいています。